

平成26年度
ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI
(研究成果の社会還元・普及事業)
実施報告書

HT26201

【プログラム名】あなたの町のニュースをつくる オトナたちにインタビュー



開催日：1/13,1/26,1/27,1/28,1/30

実施機関：神戸市立長田中学校、
(実施場所) 京都市立西ノ京中学校、
京都サンガタウン(城陽市)、
京都市立深草中学校、
キッチンNagomi

実施代表者：松浦さと子
(所属・職名) (政策学部・教授)

受講生：高校生：1名 中学生：21名
小学生：1名

関連URL：<http://radiocafe.jp/blog/2015/02/11/1-39/>

【実施内容】

・受講生に分かりやすく研究成果を伝えるために、また受講生に自ら活発な活動をさせるためにプログラムを留意、工夫した点

当初の計画(映像によるインタビュー記録作成)は子どもたちにはハードルが高すぎ、また2日間の拘束が長いという教育現場の指摘を受けて、ラジオ番組制作のスタイルで、音声のみで実践したことが「計画変更」というよりも「最大の工夫」だった。

興味のあるテーマや活動とインタビュー内容が連動するように、また、そのテーマに則したインタビュー対象者をこちらでアレンジできるよう、子どもたちの関心を聞いて、そのテーマで活躍する人の中から日程調整に協力してもらえる「オトナ」の方を見つけ、インタビューを受けてもらえるように交渉したことも、子どもたちに関心を持ってもらい、自分たちの興味関心に基づく領域でニュースを見つけることが可能なのだと実感してもらえたのではないかと。

レクチャーと連動させた実践プログラムとし、自ら発信できることを実感してもらうために、地元コミュニティ放送局の応援を得て、実際にインタビュー成果を放送できるよう交渉、準備、手続きしました。このことも子どもたちには「自分自身で発信できる」ことを実感してもらえたと思う。

また地域社会に発信する意義を感じてもらうために、収録については地元新聞社にも取材を提案したところ、日本経済新聞と京都新聞が写真入りで記事を掲載してくれたことは、メディアが身近になったことを感じてくれたと思う。

学校でも記録に残し、ブログに報告してくれた学校もある。

京都市立西ノ京中学校

<http://cms.edu.city.kyoto.jp/weblog/index.php?id=201506&no=1>

NHK京都放送局 金城均アナウンサーのブログ

<http://www.nhk.or.jp/kyoto/caster/essay/kaneshiro/index.html>

・当日のスケジュール

今回、教員のほうから4つの学校と、1家庭を数回づつ訪ねる形となったことで、子どもたちには、思い出に残る活動となったと思う。

基本的にはそれぞれの中学校や放送局に、打ち合わせ、レクチャー、収録で、計3回訪問した。

打ち合わせでは、内容を説明し、子どもたちに理解をしていただきたいコミュニティメディアの役割と、発信実践について教員やコーディネーターに説明、レクチャーでは実際にその内容を子どもたちにレクチャー、そしてどんなインタビューをどういう領域の方にしたいかをまとめ、実施者(松浦)に連絡、その内奥でインタビューが実施できるようにアレンジした。

また収録後の収録スケジュールがたいへん強行となったため、協力者 長岡野亜さんの技術と構成力が発揮され、助かった。基本的に子どもたちが聞いたことをそのまま活かしたラジオ番組にしたかったが、インタビューに応じた「オトナ」の回答が丁寧かつ長く、そのため予定した番組時間を超えてしまったので、編集を要したのである。

しかし結果としては、番組の前後に「日本学術振興会『ひらめき☆ときめきサイエンス』助成事業として放送する」ことをアナウンスできたので、効果があったのではないだろうか。まとまったものを子どもたちや保護者、学校関係者に広く聞いてもらえ、喜んでもらえたと思う。

・実施の様子(図、写真等を用いてわかりやく記入すること)

各学校ごとに実施場所や体制は異なる。

神戸では長田中学校の校長室でレクチャーをし、インタビュー収録は放送室で行った。京都では、西ノ京中学校がレクチャー(120名)とインタビュー(代表8名)収録を体育館で、藤森中学校はレクチャーをサッカー部談話室で行い、インタビューは京都サンガの城陽グラウンドそばのプレスルームで行い、深草中学校はレクチャーもインタビュー収録も放送室で行った。

福島県からの避難者の方々とプロジェクト実施は、コーディネーターの「さぽーと紡ぎ」代表の齋藤夕香さんの働くKitchen Nagomiで打ち合わせを重ねていたが、一度ご自宅に伺ったときに、今回の協力者の長男修くんがレクチャーするかたちとなった。収録は後日、きっちんNagomiで行い、母の職場を長男がレポートするかたちとなった。

なお、詳細については以下のとおり。また、写真別添します。

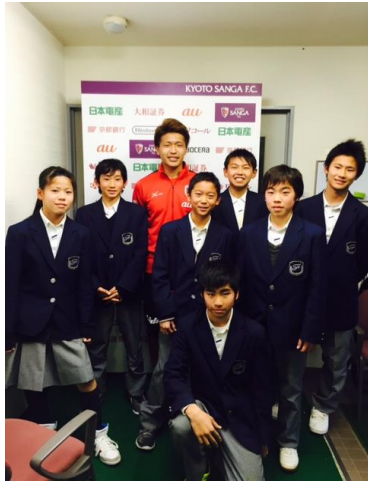
当初、想定した2日にわたってテレビニュースをつくる日程を変更し、子どもたちに希望テーマの関係者である「オトナ」にインタビューすることを呼びかけ、それを収録してラジオ番組として放送することにしました。希望テーマからインタビューに答える人をお願いする段階で教員が手を貸しましたが、子どもたちは自らインタビュー内容を考えてくれました。

京都市立西ノ京中学校の2年生の120名は漫画やアニメに関するテーマ。アニメーション制作が盛んな京都のプロダクションに卒業生を多く輩出している大阪デザイナー学院のアニメーション学科の森宏樹先生に、アニメーション制作や業界の状況について講義していただき、そののち司会も子どもたち自身が務め、代表6名がインタビューしました。アニメの道を志した森先生は、そのきっかけとなった高校時代を回想していただき、またアニメーションがたくさんの人達の協力で作られていることについて子どもたちと対話を楽しんでいただきました。
<http://www.odc.ac.jp/subject/an/index.html>



京都市立藤森中学校では、サッカー部のみなさんが地元プロサッカー選手と会うことを希望したので、城陽サンガタウン(グラウンド)をお訪ねし練習を見学、プレス・ルームで有田光希選手にサッカー部1年生がインタビューしました。試合に望む気持ち、中学時代のお話も伺え、ヴィッセル神戸から移籍してきたばかりの有田選手がとてもやさしかったと生徒たちは満足そうでした。

<http://www.sanga-fc.jp/>



京都市立深草中学校では、広報委員2年生の生徒たちが放送局の仕事に関心を持ちました。そこで、NHK京都放送局の金城均アナウンサーが来学、昨年の春の高校野球優勝校の龍谷大学附属平安高校準決勝の実況中継で、ラジオとテレビでアナウンサーの仕事が違っていることを見せてくださいました。事前に金城アナウンサーがキャスターを務める地元ニュースを見たり、NHK京都放送局のウェブサイトを見て、ユニークな質問を考えてきた子どもたちのインタビューに金城さんも楽しんだそうで、NHKのブログにもエッセイを書きました。

<http://www.nhk.or.jp/kyoto/caster/essay/kaneshiro/index.html>



いずれの中学生のみなさんも、事前に自分たちの住んでいる地域にインタビューしたい人がいることに気づくレクチャーを受けてもらい、子どもでもコミュニティメディア(今回はコミュニティFM放送)を用いて、地域で発信できることを知ってもらいました。

現在だからこそ、というインタビューにも子どもたちは取り組みました。

神戸市立長田中学校では、20年前に阪神淡路大震災に遭遇した地域住民の方々に被災当日のことや、その後の避難や復興の過程で地域住民が助け合ったこと、ボランティアが活躍したことを、こどもたちとともにお聞きできました。震災当日の衝撃がこどもたちにも伝わり、生徒には意義深い半日となったことと思います。その成果は、震災後に長田に立ち上がったFMわいわいで放送され、日本経済新聞社の取材もあり、掲載されたことで、こどもたちは本当にニュースをつくったことを実感したでしょう。

また、京都に福島から避難している子どもたちを探すため、避難者の支援活動をしている「さぽーと紡ぎ」の方に協力いただいていたのですが、インタビューしたい子どもたちがなかなか見つからず、その方のお子さんが協力を申し出てくれました。避難者のお母さんたちが働くコミュニティ・レストランが地域の人たちに助けられ、つながりを大切にしながらがんばっていることがインタビューで明らかにされ、避難者を支援する京都市七条界隈の様子がインタビューから想像でき、今の地域を伝えるインタビューになりました。

神戸の放送は終了しましたが、京都コミュニティ放送での放送日は次のとおりです。ぜひお聞きください。

<http://radiocafe.jp/blog/2015/02/11/1-39/>

・事務局との協力体制

当初は、自分自身で完結するようにと指導されたが、応募者がいない段階になって、多忙のため返金して断念しようとする実施者である松浦を励まし応援して下さるようになった。

とくに学術振興会のほかの重いお仕事を兼務してしまい、年末年始から年度末にかけて、地方入試や数件の助成事業の報告が重なり、本務の科研調査が手薄になってしまい全く自分では処理しきれない事務量となってしまったので、事務局の巻野さんが支援体制を整えてくれなかったら、この事業は完結できなかった。

・広報活動

当初の参加者呼びかけなどにもっと力を入れて広報活動をすべきだったが、学術振興会のほうで、ウェブサイトを作ってくださったことに安住し、すっかり「待ち」の姿勢となっていた。応募者がないとわかったあとは、近隣の小中学校を回って説得したが、日程が迫るほど、協力は得られないとわかった。

計画変更後は失敗は許されないと、成果報告の番組制作放送を地元コミュニティ放送局のFMわいわい、京都コミュニティ放送で放送することとし、日本経済新聞社と京都新聞社の取材を得られたことは子どもたちの励みともなったと思う。

京都コミュニティ放送の放送予定

<http://radiocafe.jp/200303002/episodes/2015-2-15oa-2>

<http://radiocafe.jp/blog/2015/02/11/1-39/>

・安全配慮

当初、2日間で実施しようと計画したときは、初日のプログラムで18時終了の予定となっていたことや、またテレビカメラ取材でまちに出て交通安全上も心配があり、現場の教員や保護者には不評で、子どもたちの安全が危惧された。

こちらでは学生ボランティアが対応しようと思っていたが、責任が追い切れないため、懸念はあった。

しかし計画変更後のラジオ収録では、基本的にゲストが学校訪問し、室内で収録する形をとったので、子どもたちの安全には心配がなくなった。

ただ、広報の段階で写真を用いることには細心の注意を払うことになった。多くの子どもたちの顔は写真広報には用いることはできないこと、後ろ姿であっても保護者の許可が必要となったことで、ラジオであってもプロジェクト全体でいえば、肖像権や情報公開への繊細な配慮を要することがわかった。

・今後の発展性、課題

今回と同様のことを同様の予算で実施するには、少し対象を減らせば実現できると思われるが、現在の体制と助成額では研究者自身は対応は難しい。しかし、間接経費がつき、職場に負担がかからないかたちになり、編集等の協力者を増やすことが許されるなら、毎年実施してもよい。

変更後のラジオ収録については、現場の中学校も、放送料を提供したラジオ局も「ぜひ継続して欲しい」と言っていた。

教育研究を通じて、子どもたちをはじめ、地域の人々を、コミュニティメディアの世界に誘うことができることはたいへん喜ばしいことである。このような事業を研究界が後押しして下さることには感謝したい。

研究部、協力者が、押し迫った時期に支援に尽力くださったことや、学術振興会の皆さんが計画の変更理解を示し、途中で投げ出しそうになった研究者を励ましてくださったことに深く感謝申し上げる。

今後しばらくはこの時期に手薄となりかけた本業の科研研究に力を入れたい。

【実施協力者】 7名

滋賀大学放送部2名、龍谷大学松浦ゼミ生1名

映画監督 長岡 野亜、さぼーと紡ぎ 齋藤 夕香

【事務担当者】 巻野利彦

事業協力 FMわいわい+京都コミュニティ放送

日本経済新聞社+京都新聞社